

江戸末～近代(19世紀後半～20世紀)の八代焼(高田焼)

【上野三家】

江戸時代から明治時代の中期まで、上野三家(あがのさんけ・木戸上野・中上野・奥上野)は、平山(ひらやま)窯で作陶を続けました。が、明治25年(1892)木戸上野家は、平山からさらに南方の日奈久(ひなぐ)に移ることになります。その後、木戸上野家の庭三(ていぞう、昭和5年・1930、72歳没)は、新しい窯を現在のJR日奈久駅裏に築きます(窯跡が現存)。この窯は、庭三の子の勝三(かつぞう、昭和43年・1968、80歳没)の時代、昭和20年代末ころまで使用されていたそうです。

勝三の弟の平(たいら、昭和49年・1974、84歳没)は、日奈久駅裏の窯の廃窯後、昭和27年に日奈久に新たな窯を築きました(現在の高田焼上野窯)。勝三の子は窯業に従事しませんでした。平の子才助(高田焼上野窯現当主)と才助の子浩之が作陶を続け、木戸上野家の系譜を今日に伝えています。

中上野家では、次(治)郎吉(昭和10年・1935、87才没)が、明治45年(1912)まで作陶を続けましたが、子の彦三は窯業には従事しませんでした。奥上野家では、弥一郎が明治35年(1902)鹿児島県の川辺(かわなべ)に移り川辺焼(かわなべやき)を始めます。子の大蔵、左膳、末喜も作陶に従事しましたが、その代で窯業は廃されています。

以上、上野三家のほかには次のような窯が、明治から昭和にかけて知られていません。

【吉原窯】

吉原二分造(二分造)、素淵(そえん)と号し、昭和8年(1933)87歳で没しました。長崎の生まれといえます。上野才兵衛の弟子となり、日奈久竹の内に窯を持っていました。晩年の俳句と年齢を刻んだ作品がよく知られています。子の安太郎(八起)も作陶に従事しましたが、父に先立ち昭和4年に50歳で亡くなっています。

【浜田窯】

初代浜田六郎は八代の人で、はじめ吉原二分造に学び、後、上野庭三に師事したといえます。明治44年(1911)に47歳で亡くなっています。長男の義徳は、明治の末

年に朝鮮に渡り、高麗青磁の復興に尽力、大正9年(1920)37歳で彼の地に没しました。窯の痕跡が、市内八幡町に残っています。

【山下窯】

山下唯彦は、明治31年(1898)の生まれ、昭和47年(1972)73歳で亡くなりました。天草の水の平焼(みずのたいらやき)の陶工でしたが、昭和のはじめ日奈久の上野家の窯を手伝った後に独立して日奈久に開窯。現代の高田焼八代窯酒井正枝(雅女)の父にあたります。弟の彦松は明治37年生まれで、橋本窯の轆轤(ろくろ)を手伝ったといひます。

これらの窯のほか、松岡窯、橋本窯も一時、作陶を行いましたが、ながくは続きませんでした。現在では、八代市内に高田焼上野窯、高田焼八代窯、高田焼古城窯が、宮原町に伝七窯、竜北町に竜元窯が伝統の作品を制作しています。